

目 次

法華經七譬の意義……………	本 多 日 生
信行の基調を説ける觀音賢經……………	井 村 日 成
釋尊の衆生濟度……………	本 多 日 生
我が理想の人傑……………	石 田 誠
聖訓摘要……………	本 多 日 生
佛教と社會事業……………	岡 山 三 治 郎
記 事……………	

第三十三號 六月

統

一



# 教

第二卷第四號出づ

本誌執筆者

その堂々たる内容  
各方面の名家執筆

本多日生  
後藤新平  
床次竹二郎  
永井米藏  
岩野直英  
高島平三郎  
志賀重昂  
佐藤鐵太郎

毎月一日 十一日發行 一部金十錢

發行所

教發行所

東京府荏原郡品川町南品川四二二

(振替東京一〇九四〇番)

本多日生祝下著書

(現在品のみで、賣切れのものは注  
文されても餘計な手数で困ります)

本尊論	布装 一部 金 七拾錢 送料 一部 金 五二拾錢
法華經要文	一部 金 一十錢(送料共) 廿部 金 一四五十錢(送料共)
法華經の行者日蓮	一部 金 十五錢(送料金二錢) 十五部 金 一圓(送料共)
修法勤行の心得	一部 金 廿錢(送料金二錢)
教育勅語と思想問題	十部 金 一圓(送料共)

名古屋市東區田代町城山

統一編輯局

振替名古屋一〇八一九

多數購讀の節は特別割引御照會下さい。

## 法華經七譬の意義

### 七、輪王譬珠の譬

第六の譬は安樂行品に説かれて居る輪王譬珠の譬であるが、これは轉輪聖王が戰をする場合に、殊動あるところの者には、王が譬に入れて居る珠を取つて、これを第一の戦功者に與へる。我國でも昔神功皇后は譬に珠を入れられて居つたといふ事が傳はつて居るが、轉輪聖王は譬の中に入れて居るところの何よりも大事な珠を取つて、第一の戦功者に與へられる。それと同じく法華經を修行する者は、釋尊の譬の中に在るところの最高の珠を戴くやうな光榮を有するところの殊勳者である、といふことを説いてある。これに就ては天親菩薩の批評も頗る面白い

本多日生

と思ふ。即ち

大乘の種子ある人の非大乘を取るには譬珠の譬を説いて治す。

とある、「大乘の種子ある人」といふのは、つまり日本人などは大乘の國民であると日蓮聖人も言はれて居る。大和魂を有つて居るところの天孫民族であつて、決して腰拔や小さな目的を以て満足するものではない、堂々たる抱負所謂使命に活きて居る國民である。もと／＼大乘の國民である、日本は朝野貴賤純一無雜と昔から言つて、上は朝廷を始めとして、下は國民全体貴きも賤しきも皆大乘法華經のやうな大なる教を奉じ、そこに非常な理想と使命を描いて進んで行くべきところの國民である、一人も雜り氣



のないものである。恰も昆崙山の如く旂檀林の如きものである、旂檀がズーツと林になつて居るやうなもので、一人々々がみな旂檀の香を持つべきものである、日蓮聖人もさう言はれて居る、「旂檀の林に入つて伊蘭を取らば後悔あらん」、日本の國に生れながらつまらぬ思想に引懸つて一生を終るといふのは、旂檀の林に入つて旂檀を取らないで伊蘭といふ臭い草ばかり採つて来るやうなものぢや、どうして日本人は左様な愚な事が出来るかと言はれて、非常に日本人の立派な国民性であるといふことを稱揚歎美された。殊に法華經に近づいて来た以上は、無論これは大乘菩薩の人である。

然るに左様に日本は大和民族であり、法華行者は尊いものであるにも拘らず、その志、その行が卑劣になつて来るといふことは、大乘の民族が非大乘を行ふといふことになる、大和民族が非大和民族的思想と行爲を執るといふことになる。非常な大きな

が左様な無禮を甘んじて受けるところに、見る者をして涙を催はさしめる、あそこに大和魂の特色がある、表面は少しグニャ／＼して居るけれども精神は確りして居る、今は表面ばかりヤ／＼と言つて腕を突き出して居るけれども、精神はグニャ／＼ぢや。堀部安兵衛でも婿に行つて飲んで／＼飲みまくれといふので、毎日酒を飲んで／＼寝て居る、とう／＼舅父が怒つて、或る日の事相變らず酔ひつゝふれて寝て居るところを槍を以て澳越しにヤ／＼と突き刺さうとした、すると今まで雷のやうな聲を聞いて居つた安兵衛が、ピタリと槍を押へて「槍の御馳走は御免蒙むる」と言つたといふやうに、酔うても酔ひ切らぬ所がある。今は酔はないでも酔ばらつてしまつて居る、そこが大變な違ひぢや、これは所謂非大乘である、今日は全く非大乘的文化ぢや。どうか今後日本人は酒を飲んでもそこに酔ひ切らない所があつて欲しい、いよ／＼大事になつたら震へ上つ

理想を有つて居つたものが、たゞ食つたり飲んだり寝ころんだりといふ事より外ないといふことになつては、大和魂といふものは何處へ行つてしまつたかわからない。今日まで日本人は大和魂を誇つて居つたけれども、善い所がだん／＼缺けて行き居るやうに思はれる。日本民族には特色があり、大きな觀念があり、男性的な道德が日本には發達して居つた、それは忠臣蔵を見てもさうである、大石義雄にしたところが、一力樓上で「由良さんこちら」とやつて居る所を見れば、女子供を相手にして居る他愛もない飲くれである、併しその精神に感ずるところの忠勇義烈の赤心に至つては、實に萬世人心を刺戟するところのものである。酒に酔うて感ずるものがある。に、心ある者をしてより感激せしむるものがある。村上喜助といふ劍士が足の先に魚を載せて突き出した「サアこれを食へ」あゝ結構々々頂戴いたす」と言つて四つ這になつてそれを食つた、あの立派な人

て押入の中に隠れるといふやうなことでは頼もしくない。この頃は拳固は振り廻すけれども、振り廻す趣意が一向立たない、その主義といふものが道に外れて居る。今日も高尾某とかいふ社會主義者の葬式があるといふことで、労働者が騒いで居る、どういふ意味か知らんけれども、他人の家に喧嘩に行つて撃ち殺されたからえらい／＼と言つて騒ぐが、吾輩は少しもえらいと思はぬ。そんな者がえらければ、喧嘩をして殺された人間はいくらもある、泥棒して殺された者もあれば、そんな者はいくらもある。併ながら日本の國に於て大勢の人間がその死をえらいと言つて謳歌しなければならぬのは、どうしても國體を中心にして考へて、顛逆の理から判斷して行かなければならぬだらうと思ふ。それを白々しくも輩級の下に於て、さういふやうな事で騒ぐ人間が假令幾人でもあらはれて来たといふことは、健全なる方面からは大いに警戒し自重もして行かなければなら



ぬ事である。それは皆非大乘の行である、大乘の國民であるならばモツと立派な教から、立派な精神に戻つて進んで行かなければならぬ。國民から考へてもこの立派な大和民族が、大和民族の本分に遠ざかりつゝある。法華行者が法華經のやうな立派な教を奉じて居りながら、迷信墮落の傾向を持つといふことは、この教に對して考へなければならぬ。「そんな卑怯未練な事やつまらぬ事をして居つて、輪王の譬中の明珠を戴くだけの光榮を有することが出来るか」と反省して、脊中に汗しなければならぬだらうと思ふ。法華を信心して居る者は、何を戴くのかといふことを考へなければならぬ、即ち本佛釋迦如來の譬の中にお蔵になつて居る、最高榮譽ある結構な珠を戴くのである、成佛することは勿論の事、何とも申しやうのない最高の光榮を法華行者は擔ふのである。その光榮に浴する時に飄つて考へて見て、自分がドンドコ法華や迷信や低級な事をやつて居つ

その子供が父の留守に毒を飲んで苦しんで居る、父なる醫者はそれを見て、良き藥を拵へて服まさうとするけれども、子供等は本心を失つて居るので服まうとしない、仕方がないから方便を設けて、父は他國に行つて使を遣はしたりいろ／＼したので、遂にその藥を飲んで毒の病が癒つたといふのである。その醫者といふのはお釋迦様である、子供といふのは吾等衆生である、毒に中てられるといふのは、社會の誘惑に酔ひ、認れる思想に感染れて行く、所謂人心の頹廢、思想の惡化といふものが毒である。さうして地に宛轉して互に取組み合をして居る、怨恨憎嫉むすんで解けざるの人生を繰返して、社會は面倒になり、國際の關係は險惡になる、内にはあらゆる階級と階級とが喧嘩をする、外には國と國とが戰爭をする。又團體と團體とで喧嘩をする、一方に商工黨といふものが出来れば、今度は一方に農民黨といふものが出来て、百姓は百姓で團結つて文句を言ふ

たのでは、本佛釋尊の御前に出て「サーこの珠を汝に與へる」と言はれた時分に、五体が震へて頂戴することが出来なくはないか。日本人の名譽の源泉は皇室であるが、至尊陛下よりして、汝は勳功ある者であるからといつて物を戴く時分に、省みて自分の心が變な思想に囚はれて、帝室を呪ひ國體を嘲つたりするやうな事があつたならば、その尊い珠を陛下より戴く時分に手が震へるだらう。法華行者も亦同じ事ぢや、その輪王といふのは謙ぢや、即ち本佛釋迦牟尼如來であるといふことを意識しなければならぬ、その輪王よりして譬の中の最高の珠を戴くのであるといふことを、法華行者は忘れぬやうにしなければならぬ。

### 八、良醫治子の譬

第七の譬は善量品に説かれた良醫治子の譬であつて、良き醫者があつてそれに澤山の子供があつた、だらう。終には坊主も鉢巻して飛び出すだらうし、教員は教員、巡査は巡査で各々團體の利己心を發揮して、各々ストライキをやります、終には巡査がストライキをやつて「今夜は泥棒は這入り放題、やれ／＼」といふ事になる、さうすると一晩の中に殺人が何十人、泥棒が何百軒、これでは逆もたまらないといふので巡査の俸給を上げるだらうといふやうなことになる。今度は坊主がお布施の値上を要求してストライキをやる、それが一ヶ月も續くと、「ごうもお経も讀ますにコソ／＼葬つてしまふのは工合が悪い、まあ仕方がない、要求を認めてやらう」といふ者が出て来る、そこで葬式の値上といふやうな事をやる、山口縣が何處かに早やさういふ事があつたといふことぢや、さういふやうな事に社會がなつて行くのは、これは皆毒に中てられて地に宛轉せる呻き聲である。今日のこの團體闘争といふことは、人生に所謂地獄、餓鬼、畜生の有様を出現して來たもの



である。「佛世に出でたまはざるときは三惡道増長し阿修羅も亦盛なり」とあるが、即ち地獄、餓鬼、畜生の三惡道がさかんに成つて来る。阿修羅といふのは何かといへば、腹を立て、喧嘩することである、團體闘争といふのはつまり喧嘩である。これは諸君はまだ能く氣が附いて居らぬか知らんけれども、彼の日本労働總同盟の連中はこれを本氣で考へて居る、即ち労働總同盟は社會闘争に参加して居るといふ、その参加する所以といふものは結局社會主義ぢや。社會主義者が殺された、その葬式に労働總同盟が旗を立て、騒ぐといふのは、これは何を意味して居るか、労働總同盟といふものは甚だ不健全なるものである事をあらはして居る。彼等は社會主義者の葬式には旗を立て、出て行き居るが、若しこれが國家に殊動ありし人であつたならば屍を向けるだらう、そこに労働總同盟の傾向といふものが甚だ不健全であるといふことを表白して居る。私は神戸の労働總同

盟の支部が或る者に對して送つたところの書面を見たが、それは全く輕佻危險の文章である、國權に對抗し、富豪、軍人、官吏を葬むれといふ、何でもかでも皆打ち破つてしまつて、さうして所謂労働獨裁の新社會を建設せんとすると言つて居る。労働獨裁の新社會とはどういふ事ぢや、露西亞と同じことである、労働者のみに依つて天下を支配しようとするのである。だから社會主義と一致するのである、これが日本の労働團體の大部分を支配して居る。これは吾輩から言へばやはり毒に中てられて居るものぢや、聖賢の教を否定し、如來の教から遠ざかつて、左様な他の毒藥を服するが故に、これが宛轉の呻き聲となりて現れて来るのである。そんな労働獨裁の新社會ナンといふものが日本に出来てたまるものではない、大體人類の文化は、労働者も尊いけれども、労働者ばかりで成立つものではない、軍人も尊いし政治家も尊い、學者も尊い、實業家も尊い、坊主も

尊い、各々必要なものが世の中に發達して來て居るのである。労働者のみが天下を支配するなどといふことは、これは飛でもない誤解である。廣い文化は無論それでは出来ないが、生産業に就て考へても、勞力のみには於ては生産を盛にすることは出来ない、況んや労働獨裁の新社會を日本の國に建設せんとするといふやうな事は、到底出来るものではない。左様な事を言ひ居るものを宜い加減な事のやうに思つて居る新聞記者なども、あまりにばんやりし過ぎて居る、日本の新聞ならばモウ少し團體なり倫理の觀念を以て立たなければならぬ。世の中の流行物だといつても事と品とに依る。そんなものは皆毒に中てられて地に宛轉して居るものであつて、如來の教と相距る遠きものである。

そこで法華經の教を尊んで行くやうになれば、そんな間違ひは起らない。そこに公平なる思想もあり、決して特殊な階級のみを保護するものでない。又日本の皇室に於てもさうである、皇室が金持の味方をせられるなどといふことはない、實に天の雨を降らすが如くに平等にお考へになつて居る、斯ういふ立派な國は何處にも無い。それは人間の事であるから、なか／＼口で言ふ程には行かぬ事もある、自分の子供を平等に育てるといつても、同じやうに着物を買つてやるつもりでも、つい姉の方には浴衣が三枚になり、妹の方には二枚になつたりする、それだからと言つて「親は不平等である、姉にばかり特權を與へた」と言ふ譯のものでない、今夜の晩飯は妹が先に食つた、その時分には魚があつたけれども、姉が歸つて來るのが遅かつたのであるからモウ魚が無くなつてしまつた、だからと言つて「どうも妹には魚を食はして妾には大根を食はすといふのは差別待遇だ」……さういふものではない。それは如何に平等に考へても、實際生活の上には多少の差別を生ずることもある、けれども心に平等がありさへしたな



らば、形の上で饅頭を配るのが二つと三つになつたからといつて、親を不平等ちやと罵る子は馬鹿者ちや、そんな者は問題にならぬ。その場合その場合の小さな出来事ぐらゐを捉へて彼れ是れ言ふべきものではない。根本の大精神が平等平和の精神を實現して行けば宜しいのである。それは如來の教も聖賢の教も、皇室の大御心も國民全體の傾向も、決して日本人は或る特權階級にのみ不平等なる榮譽を與へんとするものではない。けれども事實にこれを行つて行かうとする場合にはなか／＼面倒である、これを覆へして或る者に權力を與へても、決してうまく行くものではない。例へば労働者なら労働者から多数の議員を出せば、又やはり労働階級の爲にするやうな議論が出る。商工黨がさかになつて商人の方から多数の議員が出れば、必ず自分達に都合の好いやうに法律でも改正しやうとする。人間は大体私心が多いのであるから、大いに教を尊重して互に相警

る者は、チウえらい者でなくても、お釋迦様の教に近づいて行けばさういふ毒藥に中てられなくなる、不思議なものである。「我は佛敎を信せり」といふ自覚だけで非常に人間が善くなる、それはえらいものである。現代のやうな人心の頹廢、思想の悪化は、面倒な理窟を教へるよりも、手に珠數を懸けて、我は佛敎を信せり、大聖釋迦牟尼佛の下で掌を合せるものであるといふことを考へさへしたならば、この惡傾向といふものは一遍に擊退することが出来る。それに就て面白い事がある、吾輩が日本の各地を巡回する時、例へば法華宗なら法華宗のさかんな所、千葉縣であるとか山梨縣であるといふやうな所に行くと、本人自身は法華經も知らなければ信心もしな

めて行かなければならぬ。不平など言つてなぐり合ばかりして居つてもこれは直るものではない、なぐつて奪つたら奪つた人間がその日から直ぐ不公平な事をやる、それは五十歩百歩である。だから少々ぐらゐの不平は順序を立て、改善を叫ぶのは宜いけれども、それのみ没頭しないで、佛敎に入つて廣大なる教に基いてさうして毒の病を癒して行かなければならないのである。

それ故にこの事は天親菩薩は功德なき人の第一乘を取らざるには醫師の譬を説いて治す。

と評論して居る、即ち功德の無い者でも如來の教に基けば皆利益を受けるといふことの爲に、この譬をお説きになつたのであると言つて居る。この良藥に依つて病が癒るといふのは、醫者の方に力があるので、病人は寢床の中に寢て居るけれども、その藥力に依つて病がなほるのである。お釋迦様の教を受け

たまへ。だから千葉縣はなか／＼政治熱が旺盛だけれども、千葉縣全体の中には變な薄つべらな齒の浮くやうな新思潮といふものが流れ込んで行かない、「ごつこい待て」といふことになつて居る。これが法華宗でなからうものならば、モウ千葉縣などは一番に變てこな社會主義者などを盛んに出すべき所だけれども、それが出て来ない、これはよほど面白い事である。教といふものは徹底して居らぬやうでも、我は法華經を信せり、釋迦を奉せりといふ事だけで大きな違ひがある。家庭にしても「我家は佛敎です、佛壇があつてお釋迦様の教を奉じて居ます」と親父が言ふやうならば、子供もピンとして居る、決して變てこな事は言はない。その意味合が丁度醫者の藥を飲んで居れば、別段醫學をやらなくても生理學をやらなくても、その藥力を以ての故に次第に毒の病を癒すことが出来るが如くに、如來の教に近づいて從順なる精神を以てこれに信仰を捧げて居れば、い



つとなく尊い思想、正しい思想の方へ向つて行つて、人生の過ちを取らないぞといふのが善量品の教である。

向ほこれ等の譬の中にはいろいろの大切な意義が含まれて居りますけれども、それはあまり長くなりませんからこれだけに止めて置きます。要するにこの七つの譬全体が寄つたものが法華經である、法華經はその中の一つではなくして、この三界火宅の譬、(三車大車の譬)、長者窮子の譬、一雨三草の譬、化城寶渚の譬、醉人繫珠の譬、輪王鬘珠の譬、良醫治子の譬、この七つが一つの蓮華の譬に纏まつて「妙法」と稱せられて居るので、法華經は少くともこの七つにあらはれて居るやうな思想を包括して居るのであるから「南無妙法蓮華經」と唱へる時にはこの七つの譬ぐらゐるは心の中に記憶にして、その意味が心の中を往來するやうにしなければならぬ。心の中が空つぽでたゞお題目を唱へて、向ふには鬼子母神

機が出て來るとか帝釋機が出て來るとかいふやうな事てなしに、斯ういふ尊い教をたゞ迷信の對象ぐらゐに考へないで、この唱んで含めるやうな尊い如來の教化を尊重して「南無妙法蓮華經」と唱へるやうにして行つたならば、大いに効果が擧つて來るやうと思ふ。前にもあつた通り「珠かけながら迷ひぬるかな」といふ醉人繫珠の譬は、結構な法華經を持ちながら法華經の意味合を消化しないといふ點に於て、この譬があるのであるから、どうぞお互に袂の中の珠を取り出して、これを鏡に替へてあらゆる必要なる品物を買ひ取つて用ひるが如くに、法華經の實際的應用といふことを考へて行きたいと思ふのであります。(完)

### 信行の基調を説ける觀普賢經 (第十回)

井村日威

#### 二四、耳根懺悔の法を明す

普賢復言、汝於多劫中、耳根因緣隨逐、外聲聞、妙音、時心生惑著、聞、惡聲、時起、百八種煩惱、賊害、如此惡耳報得、惡事、恒聞、惡聲、生諸攀緣、顛倒聞、故當墮、惡道、邊地、邪見、不聞、法處。(四九七、一)

此文は今日の我等が苦惱の生活を繰返しつゝある其原因を擧げられたので、我等が現在の報果は過去に於ける惡業の因縁に報ひたもので、其惡業は何に依つて起つたかと云ふと其根元は我等の六根にある、今は其六根の中に耳根の罪惡を摘み出せられたる文で

ある、我等の耳は好しき聲、好しからざる聲に對して、種々の誤りを生じつゝある、好める聲には惑著を生じて囚はれの身と爲り、好まじからざる聲に對しては或は瞋り或は嘆き、種々の妄想を生じて煩惱を生ずる、此煩惱は我等が身心をして永久に惱ましむるものなるが故に賊害と云ふたので、百八種とは煩惱の細目を數へて百八煩惱と數へた、我等の本能的に起る欲望を思惑と稱へ、思想上に起る煩惱を見惑と稱し、此等を細別して百八種に數へたもので、此百八を更に細別すれば八萬四千の塵勞とも云ふて無限であるが、大體百八を以て我等が日常生活の上にかかる煩惱は數へ上げらるゝのである、此煩惱は必ずしも耳根の惑著で起るのでは無い、六根の何



れよりも起るのである、影略互現で一に就て擧げて他を例したものである、今は耳根を主題として論ずるが故に耳根の因縁を以て百八種の煩惱を起すと云ふたのである、百八種の煩惱起るが故に、悪事を爲す、其悪事の爲に現在の苦惱の報果を得たのである、其報は惡道邊地邪見の法を聞かざる處に墮落せねばならぬ、惡道とは地獄、餓鬼、畜生の三惡道で、此處には教の傳はらぬ處である、此處に生れては一寸浮び上ることは困難である、幸に人間世界に生れても邊地であつて、交通の不便な土地に生れると文化の恵に浴することは出来ぬ、況んや佛陀の慈光に接することは不可能である、又幸にして中國の文明に浴することが出来ても、邪見の家に生れては、佛陀の正法に依つて教はれることは不可能である、我等は今幸に人界に生を受け、文明の恩澤に浴するを得、而も如來の慈教に教はるゝの機會に接し得た事は非常な幸福であつて、此機を逸しては再び斯る幸

運に出遇ふ事は出来ぬ事であることを深く感銘して、如來の教に教はるべく大に努力せねばならぬのである、次の文に其事を御示し遊ばされて居るのである。  
 汝於今日誦持大乘功德海藏以是因緣故見十方佛多寶佛塔現爲我證汝應自當說已過惡懺悔諸罪(四九七、四)  
 普賢菩薩の御諭である、汝は今幸に大乘經典を信受し讀誦して其義を解し、經典の指し示す處に依つて、至心に信樂し、漸く懺悔滅罪して、諸佛を見奉るを得、多寶佛塔は現じて證明と爲り給ふことを得るに至り、更に一段の至誠を抽んで、諸罪を懺悔すべき様仰せられて居るのである。  
 是時行者聞是語已復更合掌五體投地而作是言。正遍知世尊現爲我證。方等經典爲慈悲主唯願觀我聽我所說。

我從多劫乃至今身耳根因緣聞聲惑著如膠着艸聞諸惡聲時起煩惱毒處々惑著無暫停時出此弊聲勞我識神墜墮三塗今始覺知向諸世尊發露懺悔(四九七、六)

ついで居つたことを説かれてあるので、此著心の爲に今日の境界に墮して居つたのであるが、今日迄其處に氣付かず、相變らず因はれの身と爲つて居つたことを悔いて今始めて覺知して、其罪過を懺悔するのである。  
 二五、耳根懺悔の故に多寶佛及分身を見る  
 既懺悔已見多寶佛放大光明其光金色遍照東方及十方界無量諸佛身眞金色東方空中作是唱言此佛世尊號曰善德亦有無數分身諸佛乃讚言善哉善哉善男子汝今讀誦大乘經典汝所誦者是佛境界(四九八、三)

行者は普賢菩薩の御言葉を聞いて、自己が過去遠々劫の罪過を想ひ起し、我今日に至るまでの著心を改悔するの一段で、先づ多寶如來の證明人たることを願ひして、而して後に自己が懺悔を爲すのである、正遍知は佛の十號の中の一で、一を擧げて他の九は略したのである、茲では多寶如來の事を指して居るのである、方等大乘經典の教に隨順し救済を受くるが故に爲れ慈悲の主なりと言ふたのである、懺悔の言葉の意味は我著心を膠に譬へて、如何なる時でも執著を起してあちらにべたり、こちらにべたりくつ

懺悔の利益を擧げたので、耳根懺悔の功力に依つて多寶如來の御姿と十方の諸佛身を見奉り、而して諸佛より御誦の言葉を頂戴致すのである、此御言葉



の中に大乘經典を讀誦すとあるが、此讀誦の言葉の意味は現代の佛教家の讀誦とは其實質を異にして居ることは、此經の前後に照して明かである、禮佛誦經懺悔の具備したる處に讀誦經典の意義があるのである。

二六、鼻根懺悔の法を明す

說是語已普賢菩薩復更爲說懺悔之法。汝於先世無量劫中以貪香故分別諸識處處貪著墮落生死汝今應當觀大乘因大乘因者諸法實相(四九八、九)

鼻根の懺悔に就て普賢菩薩のお説である、無量劫の中に香に執着したが爲めに種々の罪惡を犯すに至つた、其爲に惡道に墮落したのであるが、其は諸法の真相を能く理解して居らなかつた結果に外ならぬ、仍て其真相を能く理解せよと教へられて、大乘の因

元品の無明である、此無明が根本と爲つてあらゆる煩惱は起り來つたものである、故に今其煩惱の心を懺悔するに就ては其根本に遡つて、諸法の真相を了解し、我他彼此の差別の念を除き去り、平等無我の境に入つてこそ始めて眞實の懺悔心が起つて來るのである、此文は其處を説いたのである、此點は最も大事な事で、殊に今日佛教信者の多數の欲求とは其根底に大なる距離がある處であるが故に、佛教を信するに就ては根本より考へ直さねばならぬ事であらうと思ふ、此點が考へられねば佛陀の救済の手は中々接近して來ぬ様に考へらるゝ、普賢菩薩は末世の佛教信仰の状態を徹見して茲に改悔すべく明示せられ

聞是語已五體投地復更懺悔既懺悔

已當作是語南無釋迦牟尼佛南無多

寶佛塔南無十方釋迦牟尼佛分身諸佛。

を觀すべしと仰せられて居るのである、大乘の因とは諸法實相なりで、諸法の實相が了解出來れば斯る執着は起らないものであるとの事である、これは鼻根に就てのみの事では無いので、六根共通の病根であることは申す迄も無い事である、諸法の實相を知らないが爲に迷を生じた事は無量義經の説法品の中に最も明了に示されてある、無量義經に「一切の諸法は性相空寂にして猶ほ虚空の如く二法存することなし、然るに諸の衆生虛妄には此、是は彼、是は得、是は失と横計して、不善の念を起し、衆の惡業を造つて六趣に輪廻す」取意云々とある、諸法の實相とは此に言ふ性相空寂にして二法無きもので、方便品に謂ふ處の本末究竟して平等なるものが實相である、然るに此平等の諸法を差別して考へて我他彼此の區別を立つる處に種々の罪惡が作らるゝ、差別して考へるが故に我を愛し他を憎む、我を愛するが故に煩惱あり、執着を生ずるので、我を愛する心が

作是語已遍禮十方佛南無東方善德佛及分身諸佛如眼所見一心禮香華供養乃至而作是言我於先世無量劫時貪香味觸造作衆惡以是因緣無量世來恒受地獄餓鬼畜生邊地邪見諸不善身如此惡業今日發露歸向諸佛正法之王說罪懺悔(四九九、三)

行者の懺悔である、普賢の示教に基いて諸法實相を觀じ、己が過去遠々劫の罪過を懺悔するに就て、先づ釋迦多寶十方の諸佛を勸請し、一心に禮拜し、香華を供養し、其御前に己が罪過を發露懺悔するので、現今我等が佛前に禮拜供養を爲すは此懺悔を爲すが爲である、然るにより以上の罪過を重ねんと祈願しつゝあるの状態は矛盾も甚しきものと言はねばならぬ、その點に就ては禪宗で朝夕の勤行の時に「我



昔所造處諸惡業皆由無始貪瞋痴從身口意之所生一切我今皆懺悔」と云ふ懺悔文を唱ふることは大に意義ありと認めねばならぬ、法華宗の勤行作法には懺悔の意を少しも現はして居らぬはごう言ふものかと思ふ、本文の懺悔の言葉は前節と略同様故解釋は略するが、文中香味觸を貪つてとあるは、鼻根計の欲望では無くして、鼻根は香を貪り、舌根は味を貪り身根は觸覺に酔ふて煩惱を起すのであるが、茲に三根を共通して斯く言ふたのである。

二七、舌根懺悔の法を明す

前略 汝當自說舌根所作不善惡業、此舌根者動惡業想、妄言綺語惡口兩舌誹謗妄語讚歎邪見之語、說無益語、如是衆多諸雜惡業闍違壞亂法說非法、如是衆罪、今悉懺悔諸世雄前作、是語已五體投

のである、今の經文は専ら舌の罪過を口業の方面から責め立てゝある、其舌根を働かす影武者は意業であるから、此經文にも「惡業の想に動せられて」と説いてあるが、意志が働かすのではあるが、其意志に使はれて、舞臺で藝をやるのは舌根と云ふことに爲るから、茲に其罪過を數へ立てゝ來たのである、妄言は虚言でうそをつくことである、綺語は人をあやつる様な事を言ふたり、ほらを吹くと云ふ様な事を爲したりすることである、人の惡言と言ふ、兩舌は俗に言ふ内股膏藥と云ふので、甲と乙との間に争を起こさす様な物語をする、間違ふた考を正しき事と無理こぢつけをしたり、時には益にも立たぬ無駄話をして貴重時間を浪費したりする、今日の罪惡は大體口先で犯する者が多い、物を盗む杯は昔は腕づくで取つたが、今は辯説でよろしく誑惑して胡魔化すと云ふ時代に成つた様な譯で、今日は言論の上

地遍禮十方佛、合掌長跪當作、是語、此舌過患無量無邊諸惡業、刺從舌根、出斷法輪、從此舌一起、如是惡舌斷功德種、乃至如是罪報惡邪不善當墮惡道、百劫千劫、以妄語、故墮大地獄、我今歸向南

方諸佛、發露過罪、(五〇〇、三)

舌根懺悔の文である。六根と六境と相對した場合には舌根は味覺を司るのであるが、味に因はれた處で其過患は大した事では無いが、舌には今一つの働がある、物語をすることである、此おしやべりの方が罪過を犯す方では最も大なるものである、身口意の三業と言ふ中の口の働は舌の仕事である、口はあつても舌が動かねば物は言へぬ、匠者の如きは舌が動かぬからであろう、そこで舌がおしやべりの主要者と云ふことで責任を負ねばならぬ次第に爲つた

斯かる罪過を無意識に犯しつゝある人々も多數あることであろうが、然し我々が口舌に顯はれた事に就て、一々責任を負はねばならぬと爲ると、是は大に注意戒慎を要する事であらねばならぬ、今經には舌の罪過を説いて、此舌の過患無量無邊にして諸の惡業の刺は舌根より出づ、正法輪を斷すること此舌より起る、斯の如き舌は功德の種を斷すと説かれてある、舌根の働は諸の惡業をして一層増大せしむるが故に、惡業の刺と言ふたのである、佛陀の正法輪の教化を妨害し、此を誹謗して多の人を誤らしむるも此舌根の過患である、和合衆の僧伽團に問題を起すも舌根の過患、純信の團縁に波亂を生ずるも同様である、斯様に數へ來れば舌の過患は恐るべきものであらうと思ふ、斯る罪過の故に我々は百劫千劫大地獄に墮在せねばならぬのである、思へば恐ろしき次第ではないか、お互に口先を慎まねばなりませんとぞ、うっかりつまらぬ事は言はぬ様に口に縛を付



けねばならぬ、今は此舌根の罪過を南方の諸佛の御前に發露懺悔せんとするのである。

二八、諸佛行者の爲に説法す

是時諸佛復放光明照行者身令其身心自然歡喜發大慈悲普念一切。爾時諸佛廣爲行者說大慈悲及喜捨法亦教愛語像六和敬。(五〇二、三)

舌根懺悔の功徳を擧げられた文で、行者が舌根の過患を發露し懺悔して過去無量劫の舌根の罪過茲に消滅して、諸佛の光明に照らされ、身心悦豫して大光明の中に包容せられて、大歡喜の境地に安住して仕舞た有様を御説きに相成つた、而して諸佛は行者の爲に慈悲喜捨の四無量心と六和敬の法を説いて下さるのである、舌の過患たる惡口や兩舌の過患が無くなれば、言語の上には最早過誤は生じ無い様に

## 釋尊の衆生濟度

佛教に教へる四苦八苦といふいろいろの苦しきも、やはりこの一つから起るのである。四苦といふのは生老病死の四つの苦しみ、それに愛別離苦、怨憎會苦、求不得苦、五蘊盛苦といふ四つを合せて八苦と稱する、人は如何なる地位、如何なる階級に屬する者と雖も、この四苦八苦の苦しきを通れることは出来ない。先づ第一に生まれる苦しき、これは生れた時のことは吾々は意識して居ないからわからないけれども、親の苦しむ方から考へれば、生れる者の苦しきといふものも明かである譯である。一つ違へば生れる時に死んでしまはなければならぬ。のみならずその生あるが爲にそれが基本となつて後の苦し

爲る、其處で佛は愛語を教へらるゝ、愛語とは人より尊敬せらるゝ言語、人に好感を以て迎へらるゝ言語を發し得る様に爲るのである、六和敬と云ふことも言語や動作の上に好感と尊敬を受くる様にすることである、此が舌根懺悔の功徳である。

### 立正寺創設

今回神戸市大開通の顯本布教所を廢して同市板宿前池町一丁目一番地に立正寺を創立之れに移轉いたしました。右廣告を以て御通知に代へます。

神戸市板宿前池町一丁目  
立正寺 熊井本光

本多日生

みを呼び來すのであるから、そこで生苦といふものを説かれた。それから老と言つて年を取つて行く苦しき、言ふまでもなくだん／＼年を取れば人間の幸福が減じて行く、齒が抜けて來るから食ふ物も思ふやうに食へぬ。眼が薄くなつて來るから、讀みたい本も讀めぬ、腰が曲つて來るから行きたい所へもいけないといふやうな譯で、洵に年を取ることによつて身体上の苦痛といふものが多くなつて來る。御馳走が出て少し食ひ過ぎれば直に胃がつかへるといふやうなことが起つて來るから、この老衰の苦しきといふものは甚だひどいものである。殊に女の人などはさうである。女の誇りは大体が若い華かな所に



あるのであるから、髪の毛が抜けて来る、齒が抜けて、フガ／＼言ふやうになつて来たならば、女の誇りといふものは全滅してしまふ、まだ男の方は精神的に色々の享樂を有つて居るから宜いけれども、女は書物を見て樂しむといふこともなければ、色々な理想を描いて樂しむといふことも無いから、そこで年を取れば女といふものは非常な落莫な生活に陥るだらうと思ふ。男でもやはりその通りで、モウ女は對手にして呉れぬやうになり、頭は禿げてしまふ。そこでさういふ方面の慾望に強く生きて居つた人間は非常な落莫な感じを有つやうになるのである。それから病苦と言つて病氣の苦しみ、これ亦病氣に罹つて見れば直ぐわかる。何の病氣でも宜いといふことはないが、或は肺病でも心臓病でもどんな病氣でも、それに罹つた者から言ふならば、實に病といふものは嫌なものである。癩病などになれば勿論のことである。最初はちよつと鼻の先が赤くなつ

て来る、いろ／＼手當をするけれどもな／＼瘡らない、その中に眉毛がだん／＼抜けて来る。或は精神病に罹つて、立派な財産もあり、綺麗な奥さんだけれども、少し言ふことが間違つて居るといふことになる、人生の幸福といふものは全滅してしまふ。それは割合に多いもので、今日は何處の病院でも大抵満員である。非常に人生には病苦といふものが多し。それは自分ばかりではない、やはり家庭の關係から子供が病氣をして親が心配し、女房が病氣をして夫が悲しむといふやうな關係で、自分ばかり壯健でも大勢の家族の中には弱い者も出来て、始終寝て居るとなれば、痛切に病苦といふものを感ずる譯である。本人ばかりではない、病氣が家庭の幸福を破壊する、親父が一人病氣に罹つて居れば、女房も子供も祖母さんも、皆それが爲に一家族全体がしめつてしまふのである。如何に金があらうが地位があらうが、一つの病氣の爲に人生の幸福といふものは奪

はれてしまふ。それから愈々死ぬといふことになれば、無論あらゆる希望を失つて一死萬望を葬り去るものである。これは誰も免れることは出来ない苦しみである。

その上に又四つの苦しみが重複して来るのである。愛別離苦と言つて、愛する者と別離しなければならぬ苦しみ、それは親子の關係でも、親ひ死なぬいで自分の娘が餘所に嫁に行つてしまふとか、息子も獨立すれば朝鮮へ行くとか滿洲へ行くとかいふことになつて、何時までも同じ家庭に於て生活すること出来ぬ。夫婦の間でもやはり複雑な社會になつて來れば別居して居らなければならぬ事もある。仕事の都合では外國へ出張する人もあれば、船に乗つて殆ど家を留守にして居る人もあり、いろ／＼の關係で愛する者と別離して苦しむことが起る。その裏に又怨憎會苦と言つて、自分の嫌やな者にも顔を合せなければならぬ。優しい亭主は外國へ行つて、

性の悪い姑婆さんと朝から顔を合せて居なければならぬとか、優しい小母さんは引越してしまつて、性の悪い嬢さんが隣りに残つて居る。隣りの嬢さんが越して呉れ、ば宜いのにと思つても、善い人は行つてしまつて悪い方が残つて居るといふやうなことが人生には有り勝である。それは何も男女の關係ばかりではない、政黨政派の關係で言つてもさうである。政友會の者は憲政會を憎み、憲政會の者は政友會を敵とする。その他商賣の上で言つても始終商賣敵のやうな者が出て来る。又今日で言へば總ての工業會社のやうなものは、資本と勞働の軋轢であるから、怨憎會苦で、敵同志が寄り合つて居るやうなものである。勞働團體は戰團團體なりといふやうな考で、フウ／＼やつて居るのだからお互に堪らない。斯ういふ苦しみが人生を襲うて来る。又求不得苦と言つて求めて得ざるの苦しみといふものがある。これは割合に人間はその慾望を満足せ



しめることが出来ないで、金銭上の事でも男女の事でも、あらゆる點に於て人間の欲望は甚だ強く起つて来る。さうして満たされることは少ないのである。名譽の欲望でもその通り、自分では餘程偉いと思つて居つても、人は左程に思つて呉れない。自分で自分の效能を述べ立てるけれども、「煩さい、やめたら宜からう」といふやうな譯で、自分は餘程偉い積りで居つても、人は左程に思はない、口先では褒めて呉れても、腹の中では輕蔑して居る。そこで自分の名譽慾といふものを満足せしめることが出来ない。選舉で市會議員なら市會議員に當選した連中が、本人は非常に得意で威張つて居るけれども、はたの者は「あゝ奴さんも出ましたカイ」といふやうな譯で、少しも感心して居ない「馬鹿な奴だ、錢を使つて騒ぎ廻つて」と言はれる。あらゆる點に於て名譽の欲望といふものが自分の望む所とは非常に懸け離れて来る。或は又自分は非常な金持であつても、知

こを佛は濟度と申すのである。即ち我、我所の執を去るやうに、自己を本當に内省して了解せしめる教化が、佛の衆生濟度の教であつたのである。たゞいさなり題目を唱へるとか、念佛を言ふとか、鉦を敲くとか、坐禪をするとかいふものではない。先づこの教の意味を徹底して、お前等が自己と思ふものはどういふ具合に考へて居るか、我がものと思ふ所有慾、支配慾といふものに就ての考を直さない限りには、汝等の苦しみは減らないぞと説いたのが佛教である。それは實に明瞭なことで、何も坐つて考へなければならぬほどのことではない。「さう言はれて見れば大きにさうでございます」といふことは、一遍にわかる明瞭な教である。我、我所の執を斷せざれば吾々の苦惱は決して減するものではない。貧乏だから苦しい、金持になつたら宜いと思ふけれども、さうではない。金持になつても我、我所の執が強くくつ附いて居る以上は、貧乏人よりは金持の方がよ

らない料理屋に上れば、向ふは金持とは思はない。「彼奴あんななりをして、何か引つ掛けにでも来たのではないか」と猶疑の眼を以てジロ／＼見ながら、お茶でも出すやうな譯である。だから自分の方は始終無條件で名譽を要求するけれども、人は左様に名譽を與へるものではない。それから五蘊盛苦といふのは体のいろ／＼の感覺の欲望が盛になる。口には美味い物を食はうとし、眼には美しい物を見ようとするけれども、それがなか／＼さう思うやうには得られない。それが癪の種になつて苦といふものを増して行くのである。

斯様な八つが人生に免かるべからざる苦しみであるといふのであるが、併しその八つの苦しみでもその根柢を突くと、前に話した我、我所といふ執着の心あるが故に苦しむのである。我、我所の執を斷じて行けば、生老病死の四苦もその他の四苦も、その苦しみ惱みといふものは薄らいで行くのである。そ

り多く苦しんで居るかもわからぬ。

そこでさういふやうな事柄はあらゆる問題に分れて出て来るけれども、何時でも我、我所の執着心の薄い、今申したやうな事柄を能く了解して居る者が先づ幸福な状態に置かれて行くのである。

いま一つは罪の問題であります、この罪の由つて来る所は何處にあるかといふと、それはやはり心の煩惱よりして來ると考へるのであります。心の煩惱といふものは何を指して居るかといふと、細かく分ければ百八の煩惱とか八萬八千の煩惱と申して、限り無く人間の心には煩惱があります、先づその主なるものは貪、瞋、癡、慢、疑の五つ擧げられて居る。煩惱といふものは大体どんなものを言ふのかといふと、譯のわからぬ心の働きであつて、「煩」といふ字はわづらはすといふ字であつて、自分の善い、心を狂はすやうな風に煩さく附纏つて來るものが煩惱である。「惱」はその善い心をなやますものである。



善い考を有つて居つても、その善い考を狂はずやうな調子に出て来る。人は正しい考を有つてつまらぬ事にひつ掛らないやうに、苦しめないやうにして行かなければならぬと考へて居つても、色々の慾望が起つて来てその心を悩ます。それは頗るく附纏つて出て来る。一遍ぐらゐならば宜いけれども、なかなかしつこくやつて来る。例へば人間の食物の慾といふものは、酒なら酒が飲みたいといふ心持は、さう無暗に酒を飲んだならば体にも悪い、経済にも影響するし、人格上にも障るから好い加減にして置かなければならぬ。殊に今日は世界的に禁酒運動が盛になつて来て居る。酒はやめた方が宜いのだ、成べく飲まぬやうにしようと思つて居ると、そこへ煩惱の奴が「飲みたい飲みたい」とやつて来る。一遍や二遍ではない、何遍でもそれが出て来る。前の日にちやんと兩方で話を附けて、「それでは今日は飲まないやうにしよう」と決心して引つ込んだから、それで

濟んで居るかと思ふと、その翌日は又晝頃から「飲みたい飲みたい」とこみ上げて来る。何遍でも煩さく附纏つて来て、遂に飲まなければ承知せぬといふことになる。さうすると一方では「飲むまい」といふ心と、一方では「飲みたい」といふ心の闘ひの爲に精神が懊惱をする。「飲んではいかぬ」「いや飲みたい」といふことで、さん／＼悩む、それで結局飲むことになつてしまふのであるが、飲めばこれが害になつて、酒を飲む爲に心臓が悪いとか、昨夕は飲み過ぎて今日は宿酔で頭が痛いとか、飲んでもやはり氣持が悪い、飲まなくてもやはり何だか氣持が悪いといふ譯で、精神に懊惱といふものが絶えない。それと同じやうに拘摸とか泥棒とかいふ奴も、決して善い事と思つて盗むのではないけれども、やはり一種の煩惱で、盗みたい、盗みたいと刺戟する。あゝ銭が欲しい、銭さへあつたらうまい酒が飲める、遊ぶことが出来る。併し自分の墓口は空つただ、何と

かして銭が欲しい。「一つ盗んでやらう……」「いや又捕つて牢に入れられるからやめて置かう……」「併し酒が飲みたい、銭が無い、一つやつてくれ……」何遍もやつて来る。到底終りにバツと人の懐ろに手を突込む、その瞬間「サア又やつた」といふ良心の咎めが心を責めて非常な苦しみを感ずる。さうしてその錢で酒を飲んで、あゝ泥棒をした錢だなといふことが始終氣に掛つて苦しむ。その中に逡巡に捕つて愈々刑務所に放り込まれる、女房には内緒で盗みをした「愈々女房も俺れが泥棒ぢやといふことを知つたに違ひない、友達も知つたに違ひない。ア、モウ俺れの前途は無くなつた」といふやうな譯で、監獄の中でく／＼と懊惱する。さういふ風に煩惱といふものは悪い事をつこく附け廻して、善い精神をいろ／＼狂はして置いて、さうして後でフウ／＼言つて苦しむやうなことをする、さういふ精神が多過ぎるとお釋迦様は仰しやるのである。

その煩惱を鎮めて來ない限りには、人間の悪い事を除くことは出来ない。煩惱慾が旺盛であつたならば必ずや過ちを取り、罪惡を犯すに至る。その煩惱の主なるものは今申す通り貪慾、瞋恚、愚痴、慢、疑惑、この五つが煩惱の中の主なるものである。貪慾といふのはいろ／＼の慾望が起つて、所謂五慾と稱して、眼なり口なり耳なり、所謂五官の上から起るところの慾望、それを貪り煽らんとするものである。併ながらそれが思ふやうに得られぬ所に癡癪を起し、腹を立て、瞋恚といふものが起る。自分も忘れ人も忘れて遂に極端なる罪惡を犯すやうになる。瞋恚の爲に前後の分別を忘れるのである。瞋恚は小さい事もあるけれども、その結果は非常に恐るべきものである。初めは僅かの事のやうであるけれども、腹を立てた爲に遂に親の頭をぶち割るやうなことになる、不斷日頃大事にする本尊を引裂いて火に投するやうなことも仕出かす。どんな優しい奥さんでも腹



を立てると、亭主の頭を叩くとか、そればかりでなく、後で後悔するやうなことをし出かす、可愛い亭主の喉笛に出及庖丁を突込んだりするの、執れも皆な瞋恚の燃えて居る間にやる事である。その人が元來そんなに悪人ではないのだけれども、瞋恚の爲に精神を刺戟せられて、前後の分別を失つてやる。世の中の極端なる罪惡といふものは、執れもこの瞋恚を伴はざるものは無い。貪慾より瞋恚に移つて愈々強暴なる罪惡を執行するに至る。その上又愚痴といふものがあつて、物事の筋がわからないのである。さういふ事柄の起るのは起るべき理由があるのだから、能く考へて見るならば、夫婦別なら夫婦別れといふことも、そこに至るのは自分の方に横着をした事もあり、いろ／＼の事情があるので、一概に對手を怨む譯には行かない、己れの足らざる所も考へて見なければならぬ。それを考へないで、向ふばかり薄情だと言ふ。向ふが薄情だといふ前に自分の方

が倍も薄情なことをやつて居る。それに痺れを切らして向ふから別れ話を持出して來て居るのである。それを自分は如何にも完全であつたが如くに思つて、對手の薄情を怒ると言ふやうな馬鹿な所がある。大抵の痴情關係の原因はそんなものである。男といふものは随分得手勝手な者で、どうも賢い者とは思はれない。世間の罪惡を見るといふと大抵の場合に女の方が賢いやうに思はれる、男は自分免許でいろいろ言ふけれども、餘程愚かな所が多いやうに思ふ。その證據には奥さんが子供を遣して死んで、夫一人に委して置いたら、その子供は大抵不良少年になつてしまふ。亭主が死んで奥さんに委せて置いても、その子供は立派な人間になる。この一事を以て見ても亭主の馬鹿なことは明瞭なものである。それを男が偉いやうに思つて居るけれども何も偉いことはい。左様にして人間の心の中に愚痴といふものがある。

女は又女で小さい事から愚痴を起してクシヤ／＼言うて居る。愚痴と愚痴との結合して居るやうなものが人間の生活である。お婆さんも愚痴を言うし、女房も愚痴であるし、亭主もあんまり利巧でない。そこにいろ／＼の煩惱といふものが起つて來るのである。又あの人の十八番が」と言はれるやうに、何時もお婆さんなどは同じことを繰返す、嫁さんも同じことを言ふ、亭主も同じ愚痴をこぼすといふやうな譯で、言ふことはさまつて居る。酔ばらひが管を巻くといふが、管といふものは同じことを言ふのである。それはつまり愚痴である。つまらないことを言ふやうだが、それは酒に酔つて本性を現すので、酔はない時は黙つて居るやうだけれども、酔つてそんなつまらないことを言ふといふのは、酔はない時でも本當はそんな頭があるのである。それを酒に酔うて筈が弛んで喋り出す。だから本當は頭腦の中にそんなつまらない事を考へて居るものだといふことに

なる。さういふ管を巻くやうな人間が一パイ居る。不斷は腸を出さないからわからないけれども、腸を吐かして見たならば、皆んな譯のわからぬ愚痴つばい者である。そこに罪惡が行はれて來るのである。

新刊廣告

大僧正本多日生現下講述  
法華經の行者日蓮

佐渡塚原三昧堂、丈餘の雪に凍えて飢えて、面も「御佛の白き衣もて日蓮をおほはせ給ふか」と合掌し、龍口斷頭場裡「臭き頭を削ねられて金色の如來となる、これ程の喜びを笑えかし」と宣ひし日蓮上人、今昭和の御代に本多日生現下によりて、法華經身讀の崇さを講述せらる。信仰の者には金剛の珠玉にも比すべき小冊子か、敢て同信の士に勸む。

發行所

統編輯局

一部金拾錢(送料共) 二十部金壹圓五拾錢(送料共)  
五十部金叁圓五拾錢(送料共) 百部金六圓(送料共)  
名古屋市東區田代町字城山七十七



# 我が理想の人傑

醫學博士 石田

誠

我が父の家は神徒、母の家は禪宗であり、其の間に生れたのは我である。我が年十二、尋常中學校の二年生であつた春、極めて愚なる一人の兄の爲に我が家財は人手に渡り、學ぶに其の資力がなく、爲に物質にのみ憧憬る、叔父によりて、止むなく岡山の中學を卒業し得る事となつたのであるから、父母を思ひつゝも、自然に其の敬愛の情も亦薄らぐの止むを得ない破目に陥つた。従つて生家に於ける宗門の因縁、及び父母に於ける宗旨の傳來も薄く、而も亦明治の世の人となりて、信仰自由の空氣の中に長せしが爲に、一屬我國の家族制度より來れる宗門宗旨に何の關する所もなかつたのである。

唯少年時代の好奇心に驅られて、漠たる快談の下に起りし英雄崇拜の念は、年を重ねると共に聊か具體化して、戦記中の武者物語に満足する事能はず、多少の讀書力と智力を増すと共に、甲冑よりも治世の衣冠中に其の人物を求め、更に一步を進めて歴史の表面に顯はれたる成功者よりも、裏面に葬らるゝ失敗者に求めしが、前の趣味は後の趣味に及ばず、後の趣味は又其の後の趣味に及ばないから、遂に人物より時勢に移り、盛衰興亡の間に自然無限の興味を覚え、此の興味又一轉して精神界の何物かに觸れんとした結果、巧名富貴の産物を以て足れりとせず、是を宗教界の所生物に求めんとしたのである。

されど我は厭世悲哀の爲に求めず、寂滅爲樂の爲に求めず、哲學思想の爲に求めず、歴史徑路の爲に求めず、煩悶の爲に求めず、讚歎の爲に求めず、又罪を謝し救ひを乞はんとして祈禱の爲に求めず。只功名富貴の外より生み出されたる、偉大人物にして、而も其の偉大人物を我國に生れたる宗教家より求めんとしたのである。

翻つて我國の宗教と云へば、遠き時代の敬神思想は純潔なる國文學の美を傳へ得るのみにして、新しき吾人の前に何等其の結晶体を齎らさず、勢ひ國體と風土とに順化されたる宗教界の何物かに依つて之を求めねばならぬのである。即ち我は譯し殘されたる經典は是を知らざるも、只我は我等祖先中に生れし八萬有餘の法藏の、其の經典を我國體に應用し、且つ我が民族を感化せしめたる佛徒中より、古今に於て最も偉大なる感應的の光輝を放てる大自覺者を求めんとするのである。我國に於ける十宗八宗の佛

教中に、いづれに其の偉大なる人物を求めんかとして是を考察するに、奈良朝時代に於ける佛教徒は、優美典雅の一面に纖巧軟弱の風を養ひ、殿上人の爲め、多くは禁厭呪を事とし、法會法樂に取りし外に繪畫と彫刻の藝術のみを後世に残せるのみ。又平安朝に渴仰された佛教及び佛徒は、驕奢淫逸の方面にのみ昏睡惰眠を貪りし爲め、紺紙金泥の寫經と、無事悲哀の念を増さしめしのみである、此の間に於ける佛教佛徒には我は唯其の堂塔伽藍の莊嚴に接し、黃卷赤軸の古色に接するのみ、憾むらくは今日の我等頭上に偉大なる光輝の及べるもの一つとして是なきを痛感せざるを得ない。

世の變遷は恰も水の流るゝが如く其の停止する處を知らず、政權は西の帝都を去つて時代の思潮は東の鎌倉に移り、我國の有史以來最も異彩を放てる北條氏の膝下にあらゆる勢力は移り、就中佛教又一大革命の時機を齎して、天下の名僧は其の知識を求め、



幾多の新宗教家は其の法輪を樹立し、恰も蟻の甘きに集るが如くであつた。群集せし其の中より突如として興る、大地震動の湧出産物は一体誰れ人であつたらうか、之れを日蓮上人である。上人は佛陀の未來記に順應し、世尊二千有餘年後の閻浮世界に顯れたる、法華經の行者である。行者日蓮は異彩ある鎌倉歴史を背景とし、群集せる五山八景を蹈んで之を舞台となし、彼の權威堂々たる北條氏の迫害を蒙りつゝも、嶄然として其の當時の突發せる天變地異を取つて音楽とし、更に四海滿目の強敵を友として、佛記符合の大自然を演出せられた。その勇敢壯烈は果して如何ばかりであつたか。由來佛徒は朝廷の歸依を得るか、然らざれば時の勢者に媚び、譬へ媚びずとも紫衣を賜ひ、金剛の袈裟を與へられて、僧階僧位の高きに誇れるに、上人は生殺與奪の權力を握れる武斷政治の鎌倉幕府に毅然として反抗せられたのである。由來佛徒は權勢に依頼せざるものは殆ん

ごない、若し依頼せざるものあれば、其の多くは俗界を避けて塵外の人となれるものである。されど上人は紅塵萬丈の場所に出てて叱呼せしのみならず、國家を憂ひ世を思ふて當代の萬人を悉皆警動せしめたのである。由來佛徒は眼に涙なく血管に血なく、無念寂莫として恰も死灰の如くである、然るに上人は熱淚熱血の人にして、その云はんと欲する、又は行はんと欲する所の言行は皆な之れ燃ゆるが如くであつた。由來佛徒は只現世の無常を説き、人生の悲哀を告げ、極樂淨土を十萬億土の彼方に誘つたのみである。然るに上人は理世直下に當體運華の極樂を喚起し、佛法を世法の人間に誘ひ導いたのであつた。由來佛徒は多く眉をひそめて空想的の理を説きしも、上人は之に反し、直ちに身を以て現世的の事理を説いたのである。由來佛徒は花の開落に厭世的の悲觀主義を宿せしも、上人は果の堅實に進取的の樂天主義を宿されたのであつた。彼等は殿堂に備して極め

て悲哀の鉦を低く叩きしも、上人は天を仰いで英雄的の活氣に滿ちたる法鼓を高らかに鳴らされた。彼等は貴族的にして而も尙ほ陰險なる女性的なりしも、上人は民衆的にして而も陽々たる男性的であつたのである。彼等は味方に向つて法を説きしも上人は強敵に向つて法を説かれたのである。彼等は軟弱忍辱の退嬰を唯一の美德となせしも、上人は逆化折伏の向上を以て唯一の責務とされたのである。彼等は深窓の處女よりも更に事なき平穩無事の閑散に身を置きながら、一代の著述なかりしも、上人は戦場の武士よりも更に間斷なき死生の境に出入しながら、其の著作物の多きは殆んど古今に比すべきものがないのである。彼等の教義文章は一見極めて幽遠高尚なるが如きも、其實は淺薄平凡なるに、上人の教義文章は極めて平易簡單なるが如きも其の實は幽玄深遠である。彼等の布教は凡て他動的なるも、上人の布教は皆之れ自動的である。彼等の性格は動もすれば

地下に萎縮せしも、上人の性格は如何なる場合にも大空に飛躍したのである。彼等は法界の一部分に割據したりしも、上人は全般に亘りて占領して居られたのである。彼等は遂に自己を脱し得ずして、只陸然として無意義の生涯に終りしも、上人の大自然は遂に日蓮を脱して理想の權化となり、宇宙絶對の靈格に現出せし釋迦佛と相一致して、遂に現世を終られたのである。

嗚呼 日蓮上人の日本に生れたるは、我國佛徒の祖師中に吾人を去る事最も近く、慘憺たる熱血を持つて染め出されしその奮闘記は、現代人の精進力なき薄志弱行者に、最も強烈なる光輝を與へ、又廣大無邊なる理想の權化となりし人間超越の感應力は、自覺心なき煩悶苦惱の現代人に最も適應する亢奮刺戟を與へられたのである。加之に恰も天馬空を行く卓落壯快の性格と、其の動かざる確乎不拔の意志とは、氣慨なき輕佻浮薄の現代人に最も峻酷なる鐵



髓を以て見舞はるゝものである。更に上人は高遠なりと云へども空論にあらず、偉大なりと雖も魔術に非ず、幽玄なりと雖も現實を失はず、加之に上人の後世に到り、吾人に興へらるゝ偉大なる人格の感化を、千分の一學べば千分の一の上人を我に得べく、之を萬分の一に實行すれば忽にして萬分の一の上人を我に得べく、百分の一十分の一努力奮闘して不惜身命を期せば、學ぶ者行ぶ者其力量に従つて活き、上人は必らず我前に來らるべきである。

六百有餘年前に死せる日蓮上人は化石物にあらずしてそも何であらうか、吾人は頭上常に上人のあるを知つて努力精進せざれば、我國の將來は大いに悲しむべき暗黒となりはせないかと現在を感じつゝ將來を慮んばからねばならないのである。

上に述べた上人の思想よりして我は日蓮宗にはあらざるも、日蓮主義を崇拜して止まないものである、只少年時代より英雄崇拜の念、三十歳前後に到り、遂

に地上人間の傑物を以て満足する能はず、多年の研究考究の結果、僅に我は日蓮上人の片影を天の一方に認め得たるに過ぎないのである。

### 洗足池畔に於て開宗會

東京市外洗足池畔立正大師御銅像附屬の玉垣はその工事成功したるに  
より四月二十八日洗足池畔に於て開宗記念會を開催せられた。大僧正本  
多日生現下大導師の下に午後二時尊像御寶前に於て法要を行ふ。午後三  
時より立正教會に於て講演「開宗の大精神」本多日生現下。講演後同所  
に於て琵琶「伊豆の御難」榎本芝水君。

## 聖訓摘要

### 異體同心事

本多日生

この御書は有名な御遺文で、結構な事が多々ありますが、一二御紹介して見たいと思ひます。  
異體同心なれば萬事を成じ、同體異心なれば諸事叶ふ事なしと申す事は外典三千餘卷に定りて候。般  
の紂王は七十萬騎なれども同體異心なれば戰爭に負けぬ、周の武王は八百人なれども異體同心なれば  
勝ちぬ。一人の心なれども二つの心あれば其の心たがいて成する事なし。百人千人なれども一つ心な  
れば必ず事を成す、日本國の人人は多人なれども同體異心なれば諸事成せん事かたし。日蓮が一类は  
異體同心なれば、人人すくなく候へども大事を成じて、一定法華經ひろまりなんと覺え候。惡は多け  
れども一善に勝つ事なし、譬へば多くの火あつまれども一水には消えぬ、此の一門も又斯の如し。其  
の上貴邊は多年歳つもりて奉公法華經に厚くをはする上、今度はいかにも優れて御心ざし見えさせ給  
ふよし人人も申し候。又彼等も申し候。一々に承りて日天にも大神にも申上げて候ぞ。御文はいそぎ  
御返事申すべく候ひつれども、確かなる便宜候はで、いままで申し候はず。(遺文錄)  
この異體同心の事は、みな口にするのでありますが、餘程大事な事であると思ひます、身體は別々になつ



て居つても、心は一つになつて働かなければならぬといふことで、これは非常に大事な事である。國家としても同心協力といふことが最も大切である、先帝陛下も

千よろづの民よ心をあはせつゝ國に力をつくせと思ふ  
と仰せられた、その心を協せて國に盡すといふことが無いと、少しの事で人心が分裂をして、政治なら政治の上の黨派の觀念が強くなつて、國家を忘れるやうになるとか、資本勞働の闘ひが強くなつて國家を忘れるやうになるとか、宗派觀念が嵩じて國家を忘れるやうになるとか、皆同心協力といふことが缺ける所から起る禍ひである。それ故にどうしても國民としては心を協せて國に力を盡して行かなければならぬ。それと同じ事で法華經を弘める上には、法華の行者は、小さな事に衝突を起してはいけない、何處までも大本に基いて異體同心の實を擧げるやうにして行かなければならぬ。所が何を圖らん、日蓮門下の人は兎角詰らぬ事に引つかゝつて、この異體同心の聖訓に背いて居る、私はその弊害が非常に激しく現れて居るやうに思ふ。それはいろいろ原因はありませうけれども、畢竟するに志小なるが故に衝突が起ると思ふ、兎に角もつと崇高なる精神を發達せしめて、氣宇を大ならしめなければ、この異體同心の聖訓に副ふことは出来ないと思ふ。

日蓮聖人は茲に適き例をお引きになつて、異體同心が大事だといふことは世間の書物にも能く書いてあることで、殊に史實としては殷の紂王が七十萬の兵隊を有つて居つたけれども、周の武王の八百人の軍勢の爲に敗られたといふことがある。日本でも——これは日蓮聖人より後の事であるから茲には擧つて居らぬけれども、楠正成が千早城に立籠つて、さうして北條の軍勢を打破つたのがやはり面白い例になつて

居る。北條の軍勢は百萬と號した、さうは無からうけれどもマア百萬と言つて居つたのであるから、半分に見ても五十萬はある譯である、楠公の方の軍勢はやはり八百人である、八百人を以て數十萬の攻撃して來た軍隊に向つて遂に之を打破つたといふことは、全く異體同心、協心戮力の賜であつたと思ふ。それを日蓮聖人は非常に慕つて居られるのである。今日蓮の門下は幾ら数が多くなつても、この異體同心の趣意に基いてそれをやつて行かなければならぬ、さうすれば必ず成就する、成就するといふのは何かというと、立正安國のこの大事である、法華經を中心にしたる文明を開いて、日本の國力を發揮して、日本の力を以て世界の文明を導いて、往いては一天四海を妙法に歸せしむるといふ、この大きな理想を實現するところが屹度出来る、殊に日本の國家は正義を中心にして團結するのであるから、始めは悪が強いやうだけれども、最後は善が勝つのであるといふ事をお書きになつた。一人の人間でも氣がグラ／＼したならば何の用をも爲すことは出来ない、人間の力といふものは、心が二つに働いたならば出て來ないものである。戦争をする時でも進撃をしやうか退却しやうかと考へた時には、何の力も出て來ない、その通りで何事に就ても決心が大事である。

今日蓮門下が振はない第一の原因は何處にあるかといへば、日蓮門下の人達が異體同心の教訓を破つて居る點である。そんな事を言うても容易に出來んぢやないかといふけれども、出來ぬことはない、けちな了簡を捨てさへすれば宜い、日蓮聖人の書かれた遺文は歴々として天日の如く明かである、下らないものを持つて來るからいかん、この通り天下に共通して居る所の聖訓を解釋するに於いて何の惑ふ所がある。必ずや其處に據るべき歸着點のないやうな下手な説き方はしてない筈である、天下を支配するに足る所の



實に旗色鮮明、規模堂々たる日蓮聲人の主張である。その流れを汲む所の門下が向ふ所に惑ふといふことは有るべからざることである。これは後の人が悪いからである、今尚ほいろ／＼な派に分れて居るナンといふことは、馬鹿が多いからである。これはどうしても大い反省をしなければならぬ、先年統合の事を計畫したけれども、その経過を十分に御承知になつて御覽なさい、何も他に難かしいことがあるのではない、何等理由があるのではない、唯だ頓廢せる思想の結果斯の如きことになつて居るのである。

それからモウ一つは蒙古襲來の事に就いて仰せられて居る一節であります。

蒙古の事すでに近きて候か、我國の滅んことは淺間しけれども、これだにも空事になるならば、日本國の人々いよ／＼法華經を誘じて萬人無間地獄に墮つべし。彼だにも強るならば國は亡ぶとも誘法は薄くなりなん、譬へば灸治をして病を癒し、針治にて人を癒すが如し、當時はなげくとも後は悦ぶなり。(遺文錄 一〇五六)

蒙古がやつて來るが、それが爲に日本の國が滅びるのは嘆はしいけれども、若しやつて來なかつたならば日蓮が嘘をついたといふことになつて、法華經を益々誘ふであらう、それ故に蒙古がやつて來るのは悦びであるといふことを書かれた。この場合には日蓮は法華經ばかり思うて居つて、日本の國などは滅びても宜いと思つて居るやうだ、法華經の爲には國家を犠牲にして居るといふ風にこの文章を見る人があるかも知らんけれども、さうではない、茲に私は非常に結構な所があると思ふ。物を諫める時分には斯ういふやうに強く現れて行かなければならぬ「國は亡ぶとも誘法は薄くなりなん」といふ言葉は、決して日本が亡びて宜いといふ事ではない、國も大事、法も大事ぢやが、今や國を諫めて正法に向はしめんとする時に

は、「この正法を避へなければ國家が滅亡するぞ」といふ事を斷言するのは、國家を忘れて居るのではない、國家を思ふが故に言ふのである。子供などに對して親が教訓をするのに「お前は斯ういふ教を守らなかつたならば迎も碌な人間にはならない、未來は監獄の生活であらう」といふ。さう強い事をいつたからというて「あの親は馬鹿なことを言つて居る、道德が如何に大事だからと言つて、自分の息子が監獄の生活をするだらうといふやうなことをいふナンで、あれは屹度繼親であらう」といふけれども、さうではない。諫言の道德といふものには苦い言葉が伴ふのである。現代は諷諷の道德が盛んであるが、これも能く考へなければならぬ、何でもベタ／＼諂ふやうな道德が今流行つて居るが、眞に君を思ひ眞に國を思ふ者は、さうベタ／＼した事を澤山言ふものではない、相當な人が皆ベタ／＼いふやうになつたのは、思想が低級になつたからである。さう逆諂ふやうに言はんでも宜い、それをベタ／＼相當の人が並べ立てる世の中に今日はなつて居る、如何にも慨嘆すべきことである。この間も或る所で軍人の人が話をして居つた、その人の感激は結構であつたけれども、「是までも皇太子殿下を拜したことはあるが、今度御歸朝の時分には、三間も近い所に寄つて拜することが出來た、所が殿下が此方をお向きになつた、實に自分はこの上もなく有難かつた」と言つて居りました、それは有難いでせうけれども、向ふをお向きになつたら皇太子殿下が有難くないといふやうに一寸聞える。その人の爲にはこちらを向いて下すつたことはよいかも知らんけれども、奉迎人は兩側に居るのであるから、向ふに居つた者はどうする、左様なものではない。國民が皇室を尊ぶ關係を、さういふ微弱な根據に置くといふことは、甚だ面白からぬことである。時と場合に於いては所謂諫争の道德といふ事を忘れぬやうにしなければならぬ。



それであるから日蓮聖人もこの場合は所謂國家諫曉の言葉であるが故に、その次の言葉が直ぐ聖人の眞精神を現はして居る。子供に灸をすえるといふのは、子供が憎いからではない、又針の療治をするといふのも決してその者を苦しめる爲ではない、子供が可愛いと思へばこそである。「當時は嘆くとも後は悦びなり」である。今日蓮が蒙古の襲來といふことに就て「愈々迫つた」といふのは、之を以て日本の國を覺醒せんとするものである、これは今日の問題に就てもさういふ事があるでせう、例へば日米の問題が迫つて来る、これは甚だ慨嘆すべきことだけれども、本當に戦争をする氣は無くとも、「マアその位の事がそこに引つかつて居る方が宜からう、さもなければ國民の墮落がもつと甚く進んで行くであらうが、この事に依つて國民が自覺して来るかも知れん、それでも中々墮落が烈しいのであるから、これも宜からう」といふ。それは決して國を忘れて居るのでも戦争がよいと思ふのでも何でもなく、この社會の腐敗を矯正せんとするが故に「一發ぐらゐドンと太平洋でいくのも宜からう」といふことになる、眞に今日國家を思ふ者であつたならば、やはりさういふ考が浮ぶだらうと思ふ。その言葉を以て國を呪ふ者ちやといふやうな、さういふ譯の分らぬ解釋の仕方をしたのでは、古の聖賢がみな泣くだらうと私は考へて居る。

### 顯立正意鈔

今日蓮が弟子等も亦是の如し、或は信じ或は伏し、或は隨ひ或は從ふ。但名のみ之を假りて心中に染みざる信心薄き者は、設ひ千劫をば經すと雖も或は一年間、或は二年間、乃至十百年間疑ひ無からん者か。(遺文錄一〇七五)

これは非常に苦い教訓である、斯ういふ苦い教訓を喜んで記憶するやうでなければならぬ。例へば「唱法華題目鈔」にあるやうに、「一期の間にたゞ一遍なんぞ南無妙法蓮華經を唱ふれば、十惡五逆の罪にも引かれずして、必ず遂には佛に成る」といふやうな教訓もある、さうすると一生の間に一遍南無妙法蓮華經を唱へさへすれば、間違ひないといふことになる。「モウ大丈夫だ」といふその信念は非常に善いやうだけれども、さういふ事だけ覚えて居ると信仰は必ずや衰へてしまひ、信仰の力を失つてしまふものである。今迄日蓮門下の布教教化もそんな事はばかり力説し過ぎた、この苦い方をもつと混せないといふと胃病になつてしまふのである、これは實に大事な所である。不輕菩薩のことに關して説いてある所に、不輕菩薩に反對した者は、後に法華經の方に降服をしたけれども、その罪滅びをして千劫といふ長い間地獄に墮ちたといふことがある。日蓮の弟子等も今は頭を下げて居るけれども、今迄生れかはり死にかはり法華經に反對したこともあらうし、罪も積んで居らうし、唯だ簡単な法華の行者である、日蓮の信者であるといふやうなことで、精神の底に眞心を以つて法華經を信心しない、信心の薄い者は、千劫まで長く地獄に墮ちないにしても、或は一劫の間無間地獄に墮るかも知れぬ、長者は十劫百劫地獄に墮るかも知れぬ。「設ひ千劫は經すと雖も、或は一年間、二年間乃至十百年間疑ひ無からん者か」と仰しやつた、「疑ひ無からん者か」といふのは屹度墮るぞといふことである。墮るかも知れないではない、信心の弱い者は疑ひ無く墮ちるぞといふ事である、「疑ひ無からん」がえらい方について居る。さうすると今日のグラ／＼して居る信者は、結局は南無妙法蓮華經を唱へて居つても、日蓮の弟子と言つて居つても、地獄の方に間違ひなく行くぞといふお言葉であるから、これはどうしてもばんやりして居つてはいけないといふことになつて來



る、この點が大事である。私は幼年の時分から斯ういふ御筆調は深く感銘して居る次第であります、如何にも大切な點であると思ふ。

### 與平内左衛門書

この中に日蓮聖人赦免狀の事に關して  
法徳顯然の惠を受け、三國に比類無きの赦免を蒙り。(遺文錄一〇七六)  
といふことが書いてある。今世に多く言はれて居る赦免狀は偽物だといふことがありますが、この文はそれとは少し違ふけれども、赦免になつた意味合の言葉が書かれて居る、これは無論赦免になつた時の何かの書付があつたに違ひないから、一つの参考として宜いと考へます。

### 太田殿許御書

この中には特に申すこともありません。

## 佛教と社會事業

岡山三治郎

社會事業は現代の國家及公共團體の當然の務として行はれて居るが、眞の社會事業は、社會を組織して居る各人が、其の社會の共同生活に對する連帯責任の觀念に依つて社會に奉仕することにならなければならない。換言すれば佛教の教ふる正道、大慈悲の精神を基礎としてこそ、始めて社會事業の徹底を期することが出来る、眞の社會事業は信仰に基く、社會道徳的行爲でなければならぬ。

此の意味に於て佛教精神に燃ゆる佛教徒が、如何に社會事業を創始したかを回顧して見たいと思ふ。さて今から一千三百數十年前の、日本文化は頗る幼稚なものであつたが、推古天皇の朝になると、諸種

の文明は著しい勢を以て躍進したのであつた。此の文明の嚮導者、先覺者は、聖徳太子で在つた。太子は、用明天皇の第二皇子にて在し、御齡、二十一才にして推古天皇の皇太子となり、又攝政となり給ふた、太子は向に日本文明の母であり、工藝美術の祖神である。又日本佛教の父であり、八宗の祖師である。太子は日本建國の精神を發揮し、國家統治の根本義を確立するため、篤く三寶を敬ひ、攝政の初年に於て、玉造なる四天王寺を難波の荒陵の丘山に移して造營し、四天王(須彌四洲の守護神、持國天王、增長天王、廣目天王、多聞天王)を安置して本尊となし、其の金堂を敬田院と呼び、三寶崇敬佛教興隆



の道場となされた。又其の東北に、悲田院を設けて、貧困孤獨の倚るべき者を收容せられ、其西北に、施薬院を建て、醫藥の製造、藥品の頒布を行ひ、北方には、療病院を設置して、博く病人を救療せられた。其の時代には特に醫術及藥劑が重要視せられ、醫博士、探藥師が三韓から來朝し、醫術は大いに進歩した。是れ、佛敎的慈善事業の嚆矢であると俱に我國に於ける社會事業の濫觴であり、病院の創始である。

文武天皇の三年には、天皇、豊前に於ける四十町歩の土地を、僧の法蓮に賜ひ、醫術研究の資とせられ、法蓮は斯くの如き多大の補助を忝うして、普く施療したので、養老五年六月には、元正天皇、其の行績を賞して「沙門法蓮、心住禪技、行居法染、尤精醫濟、治民苦、善哉」との詔を下し賜ふた。元正天皇の時代には、僧滿智が奈良興福寺の寺中に、施術院、悲田院を設けて、貧窮者、病患者を

救療した。

次で、聖武天皇の皇后、光明皇后又佛敎を崇敬し、仁慈の情いと厚く、南都の法華寺に悲田院、施薬院を設置し、貧困窮乏者の收容と、病者の施薬に賜ませられ、千人の癩病患者の垢を、自ら洗ひ給ふたと傳へられて居る。

尙、此の時代、行基菩薩は、池溝を堀り、橋梁の架設、道路の開鑿、修築等の、土木治水事業を行ひ、畿内に、四十九ヶ所の寺院を建立して、佛敎の宣布と、貧救療病の事に當つた。

孝謙天皇は、天平寶字元年十二月、勅して疾病及貧窮の徒を救はんがため、越前の國の聖田百町歩を、山階寺の施薬院に施して、衆僧をして此に當らしめられた。

傳教大師は弘仁六年、美濃、信濃の山中に、廣濟、廣極の兩院を設けて、旅客の無料宿泊所となし、弘法大師は、弘仁十二年、讃岐國に、萬農池を開き、

又、大和に益田池を開き、何れも農耕の便を計り、又病者救療に努めた。

嵯峨天皇の皇后は、嵯峨に精舎を建立して大覺寺と號し、濟苦院を其の例に設けて、棄子を集めて養育し、病者及貧窮者を救護せられた。

承和二年には大宰府に、施療のため、續命院が建てられ、管理者として觀世音寺の講師が其の事に當り、承和四年には出羽國最上郡に濟苦院が設立せられ、承和十五年には相摸國に救急院が設けられ、何れも國分寺の僧侶が救貧と施療とを掌つたものである。貞觀元年には右大臣藤原良相が、私邸の一區に崇親院を建て貧窮者を收容し、佛像を安置して、毎日佛陀の名號を誦せしめて、來世の善根を植えしめ、又延命院を建て、病患ある者を收容施療した。

空也上人は井戸を穿つて、衆人の便を計り、沙門理滿は大江の渡守となつて、一切人類を度せんと發願し、或時は京都に於て病人を慰み、法華經讀誦二

萬餘部、悲田病人供養食藥十六箇度と稱せられて居る。

慈善事業に熱心な、鎌倉極樂寺の忍性菩薩は、未だ鎌倉に下らぬ前、攝津の四天王寺の悲田院、療病院で何萬人と言ふ病人を施療し、時の執權北條時宗は、土佐國大羽莊を忍性菩薩に寄附して兩院の料に充てしめたといふことである。尙忍性菩薩は極樂寺の門前に牛馬療院を建て、動物愛護事業を創設した。

斯くの如く社會事業就中療病院は、殆んど寺院の境内中に設置せられ、醫術及藥劑の發達は僧侶の手に依つて掌られて居た。此の淵源は、上述の如く聖德太子に依つて創始せられ、且發達したものである。太子の偉大なる御事蹟はすべて佛敎精神の發現であり、其の大經倫は一乘開會——一切人類を最高の理想に引き入れ、萬世に亘つて不變の公道に進ましめる——法華經の開會主義を形の上に現はされたものであつた。又自ら講師として佛敎を講じ、一乘



開會の根本義を明かにした法華經と、婦人が佛道に進む典範を示した勝鬘經と、公民指導者の典型なる維摩經との義疏を録せられた。要するに、太子は、一体三寶、一乘開會の大理想を、日本國家の生命に体现し、寶祥と、國運と、民福との三つが、天壤と共に窮りなく榮えゆくことを、國民生活の上に實施せらるゝにあつたのである。

現今の行詰まつて居る社會の各方面を清新にして、激刺たる元氣を漲らしめ、昭和の新文化を建設し、皇國の阜盛を宇内に輝かし、平和、平等、自由、協同の大理想を實現せんとするには、此の聖德太子の大理想を現代に順應して發揮するにある。

今や佛教徒は、すべての社會問題に向つて最も有力なる解決機關として活躍するに至り、社會事業の施設は着々と進められて居る。然るに、比較的其の努力の不充分を感ずるのは、佛徒の救療事業である。現今有力なる施設が二三あるにしても未だ九

牛の一毛にしか過ぎぬ。殊に國民的疾患である處の、結核病に就て、卒先して努力する所のないのは、彼の聖德太子、其他の施療院の傳統から鑑みて、甚だ遺憾に堪えない次第である。是等の方面に就ては、キリスト教徒、殊に外國の宣教師の努力に打ち任せて居たが如き、今后佛教徒の深き猛省を要する點である。

靜かに思を西天に馳せて、三千年の古昔を回顧すれば、大聖釋迦牟尼世尊は自ら病人を看護し、自ら此を救療し、亦是篤信なる名醫、耆婆をして施療に當らしめられた。今四分律を繕くに、

「爾時佛在舍衛國、不就二請食、(中略)時世尊即扶病比丘一起、拭身不淨、拭已洗之、洗已復爲洗衣、曬乾、有二故壞臥草棄之、掃除住處、以泥塗灑、極令清潔、淨、更敷新草並敷一衣、還安臥病比丘已、復以一一衣覆上捨去、爾時世尊食已、以此因緣集二比

丘僧、以下者不就請、在後行房所、見病比丘、自料理事、且告諸比丘已、汝曹比丘自今已去、應看病比丘、不應不看、應作瞻病人、不應不作瞻病人、若有慳吝供養我者、當供養病人、とあつて、病者を救濟することは、佛陀世尊を供養するに等しい。古來、佛教と醫術とは不二不離の關係の下に置かれ、徳川時代の頃まで、醫者は凡そ僧侶であり、偶々僧侶でない者も殆んど坊主姿をして居たものである、然るに、時代の推移は二者の距離を作つて了つた、これ深甚の考慮を拂ふべき點ではあるまいか? 醫術は現世の救苦、即ち一時的の救済であり、佛教は永遠の救済である。靈肉一致の救済には醫術と宗教の提携に據らねばならない、此の意味に於て、醫術と宗教とは鳥の兩翼、車の兩輪である、兩者の合一は必然實施せられなければならない。

金鼓輝く名古屋は、王舎城にも喩ふべき佛縁深

厚の地である、大聖釋迦牟尼如來の舍利奉安の聖地である、此の世尊の靈光普き中京にあつて、國友僧正は遠く釋迦牟尼佛の精神に還り、聖德太子の遺緒を承けて、茲に佛教的社會事業施設を發願し、曩に常樂寺の本堂を紫雲樹叢く東山に移し、其跡に教化會館を建設して、教化事業を旺んにし、法華經の一乘開會の根本義に因り、國民的疾患として一日も忽かせに附すべからざる、結核病の撲滅、一切病人の救療を志し、其の境内に更生醫院を開設し、耆婆の如き醫學博士石田誠氏並に醫學博士奥田史郎氏と提携して、靈肉永遠の救済を實現せらるゝに至つた。是れぞ實に、昭和の新曙光であり、救療事業の曉鐘である、無上甚深微妙の法光が、普く一切人類を照護し、皆俱成道を祈つてやまない。合掌

(更生醫院の開設に當りて)



# 記事

## 東京統一團本部教報

四月三日(午後一時半開會)花祭修行、「釋尊降誕の大因縁」本多總裁祝下。當日は統一團主催のもとに開催法要と講演あり來會者貳百五十餘名にて盛會矢野茂、岩野直英閣下等も見えた、外に施本として「花まつり」を出し、甘茶の接待もあつた。△四月八日(午後六時開會)花まつりの夜の集ひ、「挨拶」野口日主上人。當夜は信徒制中心となり「花まつり」のお祝ひを主として開催、餘興、丸一大神樂、正調追分籠、琵琶、モノマネ等、來會者六百餘名、追分節は團員神作氏の紹介に依り、琵琶は團員佐藤大太郎氏令嬢漆水師で「龍ノ口」を演奏された、當日接待役として佐藤梅太郎高橋長二、野島連平、中島千五、土屋さく等

の五氏がその衝に當つた。△四月十日(午後一時開會)日曜講演會の代りに監督布教を行ふ、「永遠の生命」池澤泰明「八相成道と人生」土屋信玄「日蓮聖人と其信徒」監督布教師森川日修。△四月十七日(午後一時開會)「信仰と生活」本多總裁祝下。當日は法要後右の講演あり、尙後總裁祝下を中心として座談會あり午後五時散會した。△四月廿二日午後一時午

より青山安川邸に於て地明會春期大會、「信仰と修養」本多會長祝下當日は晴天にて來會者八十餘名、講演後同邸園内にて記念撮影をなし、次で佐藤漆水師の琵琶の餘興と共に、會主安川氏より茶菓御辨當の饗應あり、樂しく午後五時散會した。△四月廿日(午後一時開會)活動映寫會「時代人心を憂へて」眞族院議員男爵赤上清純閣下。活動映寫會東京日々新聞社後援のもとに開催、「支那動亂」「智識の智識」「喜劇」等。當日來會者四百餘名、岩野少將も來會された。統一團幹事は、早川大吉高橋長二、野島連平、小野とし子、安江久子原木ひで子氏等出席さる。

## 各地教報

例會「南洋紀行」岩崎氏△後岸會廿一日久し振りに本多祝下を迎へ新築の立正寺で、「三寶の恩」の講演あり聽衆堂に滿ち非常の盛會。廿四日「信仰の基調」山口師、到彼岸「京藤師△廿七日例會」高き情緒「岩崎氏」唱題「熊井師△四月七日管長如迦教講演會」「佛教徒の覺醒すべき三大問題」井村祝下「生命の本流へ」草切師演員盛會△十日講演會「釋尊降誕の意義」本多祝下大盛會。

△大阪教報 四月五日蓮成寺にて「生命の本流へ」草切師、佛教徒の自覺「井村祝下△八日妻婦人會」釋尊の降誕に就て「夜中央公會堂にて」釋尊の大意「△九日壹陸軍糧秣廠にて」「三大自覺」△高島屋店員の爲め「人格の完成に就て」△同夜大紙俱樂部にて「佛性と本佛」△十日ラヂオ放送「精神の綱領」何れも本多祝下出演。△二十二日堂岡寺にて「法悦歡喜」石井信一氏「信仰の要義」上田師△二十五日徳水宅にて「日蓮聖人の教」井口富雄氏「佛教の要義」上田師△二十八日開宗記念會大紙俱樂部にて開催「立教開宗の聖心」能仁權大僧正、何れも頗る盛會多大の効果を奏せり。

△金洲教報 △家庭講演、四月六日三番町水野氏宅にて「娛樂と信仰」能仁一十師△家庭講演、四月七日日本多町黒田氏宅にて「たのしみとつゝしみ」能仁一十師△説教會、四月八日釜屋本成寺にて「信仰の要諦」寺島常誓師△常樂會、四月十五日本覺寺にて「佛教の社會事業」芝野醫師。「肉を救ふ靈を救ふ」寺島常誓師△花まつり法會、四月二十六日表本長寺、「正信の要諦」三谷會善師。「花まつりに就て」武田顯龍師△正統佛教講演會、同夜本長寺、「釋尊最初の說法」三谷會善師「大乘主義」武田文學士△家庭講演、四月廿九日本多町河合氏宅にて「法華參禪の人々」能仁一十師。

△名古屋教報 五月八日統一團婦人會例會、國友文學士の法華經講義。聽衆百餘。△十八日本多大本正祝下の法華經聖文講義、聽衆百餘△十九日夜社會教化講演會、本多祝下は那先比丘經を説いて佛教の大綱を講演せられた、聽衆八百△十六日より、服部紡織、日本車輛、東洋紡織大倉棧工場、菊井紡織、專賣局、東洋紡織尾張工場、豊田紡織、豊田織機、三菱内燃機に於て本多祝下の講演、聽衆計九千餘△十九日午後教化會館婦人ホームで名古屋婦人會の爲に祝下の講演會があつた。

△四日市教報 四月七日安樂寺に於て講演大會「開會の辭」田久保本誓「眞の力」三谷會善布教師「佛教の活用」監督布教師管川日堂臺下にして頗る盛會△四月十七日治田實成寺にて「日蓮主義に就て」田久保師「佛陀の教と正しき信仰」國友日斌僧正△五月七日佐藤柳宅にて「本門の三秘」田久保師△五月九日實成寺

△朝日講開催 千葉縣大網町宮谷本國寺に於て例年の通り四月十四日講長土屋師導師木村、栗原、北田、山田山本等の諸師出席、午前十時開講會後修、並に朝日講員各組先詣聖觀音法要等最修、午後一時より土屋師の



祝歌「神太西比利亞方面の日持上人と七里法  
垂」野口樞大僧正「昭和の御代に處して」栗原  
師講演、七百の聴衆何れも群聽感激隨喜せざ  
るはなかりき。午後七時「統一節」手代木師

「昭和の御代に處して」續き栗原師等、夜間の  
聽衆六百、本年は該國中に付餘興に遠慮謹愼  
し、從來になき靜肅にして緊張味を帯び、堂  
内に響り響り唱題の梵音聲絶へざりき。

續り込み、同六時中大正天皇御一周忌法要を  
嚴修し、引續き祝歌通夜をなせり。  
同廿四日夜二席の遠忌法要をなすこと前  
日と同じ、即ち行道、稚兒囀語文、稚兒問答、  
慶讃文等二時間餘嚴肅なる法味を擡げたり。

### ◎立正大師六百十五遠忌大法要嚴修

福井縣志津村山内本行寺に於て

彼れてよりの計畫なりし本堂内外の修繕改  
築増築を了し、四月二十三日より三日間、本行  
寺に於て宗祖六百十五遠忌、大正天皇一周忌  
稚兒音楽大法要を營み、前代末閏の盛況を見  
た、即ち廿三日午前十時管長親下一行僧員十  
數名村外れに到着祝下には用意の御駕籠に御  
移り、「れりこ」を先頭に、出迎ひの檀信徒の  
歌題目の聲に連れて、行列は除々に前進す、  
御駕籠に續いて僧員二十數名、近村より集ま  
れる者其の後に續き、延々として盡きず、山  
頂より打出す花火の音は天に響き一天微雲だ  
も見えず、天氣晴朗諸天も此の大會を讃歎せ  
るものの如し、路傍に炬を成す信者は合掌禮

に祝下を拜す、五丁の道程二時間餘にして本  
堂に達し、祝下を導師として全員動行せらる。  
午後五時全員祝下の御宿に集合、花火の音  
響を合圖に「れりこ」稚兒、音楽、歌題目、僧  
員、御駕籠、信徒等の順序に列を成し本堂へ

の聴衆をして隨喜感泣せしめたり。  
後、能仁一十師、山主藤啓純師、京藤義應師  
萩原日道師△廿四日午後、山主藤啓純師、武  
田顯龍師、井村日成祝下、清水一乘師、武日正師、  
島日誠師、三谷會善師等各師の長廣舌け參詣  
受くる様になつて、遂に微力ながら熱烈なる  
信徒によつて本化の道場、進分教會所の設立  
を企圖し、昨年来工を起して土地相應の小ぢ  
んまりした會堂は竣工した。出願中の新設願  
の許可を待つて落成式を舉行する豫定によつ  
て居るが、やがて中部伊勢に本化の教風を  
宣揚すべく、幾多の功德は積まる、であら  
う。

### ◎伊勢追分の新教會所

三重縣三重郡日本村道分の宿、東海道五十  
三次を四日市から西へ、右に鈴鹿の峻嶺を越  
えて京都に向ふ本街道と、左に伊勢大神宮に  
詣づる参宮路との分岐點、そこに横線があつ  
て法華經を信じ、日蓮主義を奉ずる信徒の一  
團があつた。近く四日市の安樂寺に屢々開か  
る、本多祝下の講筵に衆集聽講を續けて居た  
が、やがて名古屋四日市から例月出張指導を

### 東京統一團本部の

### 紀念「圖書室」設置に就て

今回統一團本部改築落成を紀念する爲に紀念圖書  
室を設置する事になりました。つきましては已に  
幹事早川太吉氏の御努力に依り大分圖書も集りま  
したが、まだ一豫定の處までは集りませんので  
是非皆様一般に御願ひして完成させ度いと思ひま  
す。御不用の圖書が有りましたら一冊でも二冊で  
も結構です、(何んでもよいのです)御寄贈下さい  
ませ、呉れなくも御願ひいたします。尚皆様の内  
で統一誌の第一巻第一號から最近までの分を御持  
ちの方はありますまいか、若しおありでしたら是非  
御寄贈を願ひます。書籍は宗教、哲學、道徳、  
政治、法律、經濟、文學、文藝、小供用のもの其  
の他何んでもよろしい、是非御願ひいたします。  
(市内は御報に依り頂戴に参ります)

尚御送り下さる所は統一團事務所宛に御願ひい  
たします。

昭和二年四月廿五日

東京淺草區北清島町

統一團圖書室設置係

### 立正講座

聽講員募集

本會は妙法宣布の道場たらしむる目的を以て日蓮  
聖人の遺蹟洗足池畔に立正教會を建築し大正十五  
年五月より立正講座を開催せり

- 一、講目 法華經講義(法師品以下)
- 二、講師 文學士 小林一郎先生
- 三、日時 毎週日曜日午後二時より約二時間
- 四、期間 昭和二年五月十五日開講  
昭和三年十二月講了
- 五、聽講料 毎月分納金壹圓 一時前納金拾圓

洗足池は荏原郡池上町と馬込村との境界に在りて風景絶佳東京  
郊外に於ける景勝の清遊地なり  
日蓮聖人の遺蹟御松庵、勝海舟先生墓地、西郷南洲先生留魂祠  
は池の東畔に在り又日蓮聖人臨終勸修寺として建立せる立正  
大師銅像及本會の建立せる立正教會は池の西畔に在り  
立正教會の位置は目黒蒲田電鐵大岡山驛南方約五丁池上電車站  
々各驛東方約八丁なり

聽講希望者は氏名住所及職業を記入せる書面を  
以て開講當日迄に本會事務所に申込まれたし

昭和二年四月二十日

東京府荏原郡池上町雪ヶ谷四十一番地

財團法人立正會



社寺建築 及臺灣檜材の安價提供  
設計監督

(三年以上水蓄乾燥材)

當所は社寺建築改善の目的を以て臺灣總督府及内務、文部兩省の了解の下に臺灣檜材の安價提供及工事の設計又は監督の御依頼に應じ可申候間工事の大小に拘らず左記御便宜の個所へ御相談被下度候。

追て設計規程並に目安表又は臺灣檜木質見本等御入用の向は御申越次第呈上仕候。

(充分なる水蓄乾燥をなしたる檜材最も優良なるも水蓄不)

東京市四谷區霞ヶ岡町十六番地

(明治神宮外苑内日本青年館正門前)

社 寺 工 務 所

(電話青山六〇二八番)

神奈川縣 鶴見町

社 寺 工 務 所 鶴 見 支 所

福岡市外堅箱町馬出松原

社 寺 工 務 所 福 岡 支 所

(電話二二三〇番)

大阪市西區市岡町七十九番地

社 寺 工 務 所 大 阪 支 所

(電話西三二二四番)

臺灣檜材の六特徴

- 一、耐久防腐
- 二、蟻害絶無
- 三、香氣清楚
- 四、木質堅緻
- 五、理整松木
- 六、木高彩色

統一價定		
一冊	半冊	一冊
金貳拾錢	金壹圓貳拾錢	金貳圓貳拾錢
送料五厘	送料共	送料共
前	前	前

統一廣告料		
表紙一頁	一頁	半頁
金貳拾錢	金拾錢	金五錢
前	前	前

昭和二年五月廿五日印刷  
昭和二年六月一日發行  
東京府在原郡品川町南品川四百十二番地  
(第三百八十七號)

不許複製

編輯所 編輯兼 國友日斌  
印刷所 鈴木日雄  
東京府在原郡品川町南品川四百十二番地

發行所 統一發行所

名古屋市東區田代町字城山七十七番地

編輯所 統一編輯局

電話東京五一〇七一番  
名古屋一〇八一九番

目 次

統一團の回顧と自警.....	本多日生
信行の基調を説ける觀音賢經.....	井村日成
釋尊の衆生濟度.....	本多日生
渡歐雜感.....	上田辰卯
肺結核治療の秘訣.....	奧田史郎
聖訓摘要.....	本多日生
釋迦牟尼佛.....	長谷川義一

第三十一一年七月號

統

一

